



## 共々のいのちに

今年も暮れようとしています。思い返すと、明るい話は少なく、人間関係の希薄さは淋しく、身につまされる超高齢化社会は止まることを知らず、ものや情報は溢れていても幸福感は得られなくなった時代が続いています。

それでも今あることは「生かされている」という事実の証です。そのことを「おかげさま」と頷かさせていただきながら一年を終えたいものです。

\* \* \*

「上手に病気をし、上手に年を取りたいなあ」とは、ある禅僧のことばです。私もあつという間に古稀となり、大人への階段を共に上った悪友たちも、ぽつりぽつりと欠けていき、自らも思わぬ大病を経験して、しみじみと「老病死」を感じながら、またどのようにあっても心豊かでありたいとの思いを強くしています。「上手に病気をし年をとる」のは難しく、「美しく年をとる」のは更に難しいことを実感しながら、先立って往った人たちや、老いや病と共にあって人の手を借りながら生きている人たち皆を「上手に病気をし、上手に年をとったなあ」と思えるようになっていきます。

先の禅僧はその上に「死ぬまで勉強だ」ともおっしゃって

います。自分にはそんなことはますます無理だと思っていたのですが、近しい者の衰えや、親友たちの死に接するたびに、その誰も「美しく年をとった」と思えるようになりました。

この「勉強」とは、趣味に生きたりカルチャーセンターで学ぶことではなく、生涯をかけて生きること（いのち）の真実を学んでいくことで、その師とは、周りのすべての人たちだと気づきなさいということだったと味わえるようになってきました。

先立って往った悪友も、今は認知症や寝たきりになってしまった兄弟も、間違いなく私が歩んでいく人生の師となってくれています。その姿が、「いのちとは、わがものではありながら、わがものではない」ということを教えてくれています。そのことに気づき頷き続けることが「死ぬまで勉強」だと思います。

\* \* \*

最近では日本でも癌患者に病名を告げるようになりましたが、アメリカなどでは、ほとんどの場合最初から告知し、それが小さい子供であっても話して聞かせていました。癌は死の宣告ではなく、治療の時間は与えられており、その貴重な時間を無駄にさせないことと、死後の世界は暗黒ではないという宗教が根付いているからできていることを、海外布教で実感しました。

しかし日本人には病気の間を「空白の時間」とみる傾向があるように思います。誰もが逃れられない「老・病」でありながらマイナスで捉えています。ですから必要以上に健康でいたいと焦り、それがかえって現状を否定した人生にしてしまっているのです。短い期間ならまだしも、何年もの養生や介護を必要とする人たちの人生を空しいものだと言っているようなものです。現状を受け止め、それも人生の一部として生きる、病気や老いてゆくのは人生そのものです。

誰も「老病死」から逃れられないとはいえ、その人生は様々です。そのことへの思いやりを忘れてはなりません。その様々な人生の段階にそれぞれの生き方があり、これが一番であるとか、私はこうだからと押し付けたり、人と同じである必要もありませんが、私たちにはその誰にも通じる道しるべがあります。それが先立って往った人たち、今は人の手を借りて生きているその一人一人の歩まれた道、今ある状況（いのち）を受け入れ、病気になっても老いてもそのいのちを生きる姿です。

この瞬間にも今あるいのちに生かされていることを喜び、共に次の一歩へと繋げてまいりましょう。この一年ありがとうございました。合掌

## 奏庵年末法座

12月26日(月)

午前11時～

「真宗宗歌」

正信偈

住職法話

ご文章

「恩徳讃」

～\*～

おとき

年もいよいよ押し迫り、本年最後のご法座を迎えます。毎月お参りいただく皆さまと正信偈を読み、お念仏のみ教えをお味わいし、和やかな集いをともに出来ましたこと、何よりありがたく心より御礼申し上げます。ついこの前までお参り下さっていた方がお浄土に還られたり、中には体調を崩された方もおられ、寂しさもありますが、共々に生かされてきたおかげに思いをし、一年を納めさせていただきたいと思っています。どうぞお参り下さい。



## 平成29年度年忌表

年回	没年
1周忌	平成28年
3回忌	27年
7回忌	23年
13回忌	17年
17回忌	13年
23回忌	7年
25回忌	5年
27回忌	3年
33回忌	昭和60年
37回忌	56年
50回忌	43年

以後50年ごとにお勤めするのが慣習となっています。

ご法事は、亡き人を縁にして勤められることから、「亡き人のため」に勤めるものになってきて久しく、「亡き人を慰めるため」とか「法事をしてご先祖を安心させてあげる」といった認識です。

しかし、お釈迦様が悟りに至って仏となり仏教を開かれたその時から、先祖供養やお葬式のためではないと弟子たちに説かれ、亡くられる時にも嘆き悲しむ弟子たちに、「死者を憂うことはない、自分自身が悟りに向かって仏道を励むように」と諭されています。亡き人はその仏縁となって下さる尊い仏さまです。

仏となっておられる方々が願っておられるご法事は、仏道を歩む道しるべとなって下さっていることを感じ取りその願いに応えることです。ご法事に日時の良し悪しはありません。どうぞ仏縁を大切にお勤め下さい。

## 編集後記

思い返せば「すっきり感」のない一年だった。特に時代を象徴する方々の「言葉」を聞くにつけ、その結論や成果を受け入れる前に「不快感」が先に立つ。■そんな中、思いもかけずノーベル文学賞を受賞してしまったボブディランの対応は、へそ曲がりとも言えるノーベル財団の選択に正当性をもたらす、今でいう「大人(神)対応」だった。授賞式には出席せず代読された短いメッセージは、自分というものをことさら主張してはいないのにボブディランという人間がしっかり伝わり、何より関わる全てを傷つけない心配りがありカッコよかった。■彼是我々団塊世代の青春とともにあったフォークミュージシャンだ。私自身は一応下手でもジャズマンとしてフォークというジャンルを避けてはいたが、絶え間なく流れていた彼の歌に大きな影響を受けたことは確かだ。当時からフォークをする人間は熱かったが、ジャズを好む者が政治に無関心を装ってはいても右だったわけではなく、若者の間に吹き荒れていた反戦への思いを同じく持っているのは、あの時代の歌が社会のせいだけにした恨み節ではなく、若者の哲学があったからだろう。その象徴がボブディランだったと思う。■彼が受賞したからといって皆がその気になってはいけない、今の流行りは道徳どまり、道徳から文学は生まれえないもの。道徳は社会規範として大切だが、時代によって善と悪を変えてしまうものでもあるからだ。彼が「歌は文学か」と自問したことはないと言うのは、フォークという立ち位置への謙虚さと、これからも揺るがない信念の宣言であって、「素晴らしい答え」を出してくれたと感謝したのは、誠実さと少々の皮肉だと思う。■メンツとプライドは似て非なるものだ。偉い方々はどうか言葉(文学)を謙虚に学んで欲しい。そして陳腐で下品な言葉で人を傷つけない社会をと願う。どうぞよきお年を！ Norimaru